

に於て生きなければならぬ。

エフェソ書、(註三)及び、コロサイ書の二篇は、この崇高な『啓示』に溢れてゐる。パウロの雄辯がかくの如き哲學的の深さを示したことは、さきがない。彼には、悪龍を屠つて、その岩窟にはひり、潜れた寶を探し出す、傳説中の勇士の面影がある。即ち、パウロは謬説と戦ひながら、同時に、殆ど到達し得ないと思はれた眞理を顯にした。彼は好んでそれを比喻とし、アレゴリーとした。建物の活ける石が、(イスラエルと異邦人との)二つの壁を合する隅石に支へられて『主に於て一の聖なる神殿となる』と云ふ、神殿を以つて象徴した此の比喻は、ことにユデア人にとつて平易であつた。しかし、運動競技を見慣れてゐたギリシヤ人には、

『彼に於てこそ體全體に固り、且、整ひ、各四肢の分量に應ずる働に従ひて、凡ての關節の助を以つて相聯り、自ら成長し、愛によりて成立つに至るなれ』(エフェソ書四ノ一六)と云ふ身體の比喻の方が明であつた。

神祕家の本領は、<sup>ミステック</sup>形象を超えて、純理念の顛を極め、實體の智的直觀に至ることである。囚人パウロは、彼の孤獨の時間に、成熟し切つた信仰の翼を以つて、最も崇高神祕なる觀想に上つた。さうして、彼は、之を後に聖ヨハネ福音書の中で輝くやうな、深淵にして光彩奕々たる文字に盛つた。(彼はヨハネ

のように、ロゴスと云ふ文字は用ひなかつたが彼はコロサイ人が、神と世界との關係に就いて、グノーシスの謬説に迷はされてゐたのを知り『仲介者』の眞の性質を説明した。(註四)

『御子は、即ち、見え給はざる神の御像にして、一切の被造物に先だちて生れ給ひしものなり、蓋し、萬物は彼に於て造られ、天にも地にも、見ゆるもの、見えざるもの、或は王座、或は主權、或は權勢、或は能力、皆彼を以つて、且、彼の爲に造られ、御自らは萬物に先だちて在し、萬物は彼の爲に存す。

〔コロサイ書、一ノ一五—一七〕

彼が自己をその中に忘却した深淵は、即ち、全き孱弱さの中に完成した、神の全能の不思議であつた。『己を無きものとし：自ら謙りて、死、而も十字架上の死に至るまで従へるものとなり給』へることが、神の偉大さの表現であつて、『是故に、神も亦之を最上に擧げて、賜ふに一切の名に優れる名を以つてし給へり、即ち、イエズスの御名に對しては、天上のもの、地上のもの、地獄のもの、悉く膝を屈むべく、又、凡ての舌は父にて在す神の光榮の爲に、イエズス・キリストの主<sup>ミスター</sup>に在せる事を公言すべし。』(フィリッピ書、二ノ七一—一)

如何にして、奴隸となり、『罪となる』の屈従が、神の光榮を増したのか。かくの如き玄義を知悉せんが爲には、『己が死の肉體』を出で去らねばならぬ、と云ふ事を、パウロは知つてゐた。然らば、なほよ

く之を理解することが出来よう。

『死ぬるは益なり』(一ノ二二)

しかしながら、ローマの法廷に於て、放免せられるか、或は死刑の宣告を受けるか、その一が自分の運命だと思つた時に、彼の意志の奥では、貴い戦闘が開かれた。彼はその事をフィリッピ人に打明る。

『我は立去りてキリストと共にあらん事を望む。これ我にとりて最も善き事なり。されど、我が肉身に留る事は、汝等の爲に尙必要なり。かく確信するが故に、我は汝等の信仰の進歩と喜悅とを來さん爲に汝等一同と共に留り、且、逗留すべき事を知る。我再び汝等に至らば、キリスト・イエズスに於て、我に就きて汝等の誇る所は彌増すべし。』(一ノ二三―二六)

神祕的平安、『一切の智識に優れる神の平安』(四ノ七)の驚くべき平衡よ。何事を期待する時に於ても、聖人は喜悅の中にある。他人ならば、地上に生命を延ばさんとの願望は、全然人間的の願望であるが、パウロは、涯なき善の希望を、一時の事業の上に置くが故に、長命を以つて犠牲となして、これを聖化する。彼は法官等が、なほ彼を生かさんことを豫期する。これは彼の願望に對しては試煉であるが、兄弟等はなほ彼を必要とするのである。しかし、また『信仰の供物と祭との上に、彼の血が漑がるも』(二ノ一七) 彼は之を喜ぶだらう。又、それは同時に信者等の喜悅となるであらう。

その時までには、彼の鐵鎖は、すべての信者にとつて、模範であり、力であり、光榮である。

『我今、汝等の爲に苦むを喜ぶ、又、キリストの御苦の缺けたる所を、御體なる教會の爲にわが肉體に於て補ふなり。』(コロサイ書一ノ二四)

彼が苦むのは、すべての選まれし民が聖徒の先榮裡に入り終る時に、始めて完成すべき、キリストの不朽の御體の成就を早めんが爲である。キリストがその御受難によりて、世界の救済を贏ち得たまひしが如く、パウロはキリストの功德によつて、自分の兄弟等の爲に、奮發、恩寵、平和、歡喜の増加を贏ち得るのである。

彼が『鎖に繋がれたる使節』(エフェソ書六ノ一九)なることは、福音の奥義に更に一段の權威を添へることであつた。彼が戦ひつゝある艱難を見ては、信者等の信仰は益々堅固となり、彼の如く、又彼と共に苦むことを願ふに至つた。

パウロは、單に書簡を贈つて、彼等を勵ますばかりでなく、彼等の許に使者を遣はした。使者は一方に、彼がローマでしてゐる事、その狀況を諸教會に傳へると共に、使徒の許に各教會の近狀をもたらし

た。

くであらう。チモオテは彼と共に福音の奴隷となつた子である。

『かくまで我と同心して、眞心を以つて汝等の爲に慮る人、又、外にあらず。蓋し、人はみなイエズス・キリストの事を求めず、己が事を求む』〔フィリッピ書、二ノ二〇―二三〕と彼は書いた。

しかし、此の書簡を携へ行くものは、フィリッピ人の許より多くの贈物を齎らして、彼の近況を尋ねに來たエパフロヂトであつた。

『汝等が贈りし物の其の香馨しく、神の御意に適ひて嘉納せらるゝ犠牲を、エパフロヂトより受けて飽足れり。』〔四ノ一八〕

彼は缺乏の中にも、潤澤の中にも、萬事について満足してゐる。しかしながら、彼は特に此の贈物について感動した。何故ならば、それはフィリッピ人に、神の聖寵の好果の豊なる徴であつたから。エパフロヂトは病氣にかゝつて非常に重態に陥つた。しかし『神は彼を憫み給ひ、たゞに彼のみならず、わが悲の上に又悲の重らざるやう、我をも憫み給へり』〔二ノ二七〕と、パウロは率直に書く。今、エパフロヂトは恢復してフィリッピに向けて出發する。望郷の念に堪へざるが如くに。

パウロの忠實なる伴侶、チキコは、パウロの名によつて、コロサイ人を慰めん爲に出發した。彼は

『至愛の兄弟』オネジモを同伴した。脱走した奴隷オネジモについては、フィレモン書に詳である。

フィレモン、アッピア、アルキッポは、コロサイの有力なる信者であつた。コロサイの教會は彼等の家で集會をしてゐた。フィレモンの奴隷オネジモは、主人の金錢を盗んで脱走し、ローマに來て潜伏した。しかし、彼はエパフラに發見せられて、パウロの許に出入するやうになり、遂にキリスト教徒となつた。使徒は彼を主ハの許に送還し、同時に彼に託して、簡単な、而も聖者の溫情の流露する書簡をフィレモンに送つた。

『キリスト・イエズスに於て、事に應じて爲すべき所を命ずるは、我が敢て憚らざる所なりと雖も、寧、愛に對して勧め、斯の如くなる我、即ち老人にして而も現にイエズス・キリストの囚人たるパウロ、鎖に在りて生みし所のわが子オネジモの爲に汝に希ふ。彼は嘗て汝に無益なりしかど、(註五)今は我にも汝にも有益なり。我は之を汝に送還す。願はくは、汝わが腸(の子)の如くに之を受けん事を。我は彼をして、汝に代りて、福音の爲に繋がるゝ我に仕へしむる様、我と共に留らしめん事を欲したれど、汝に聞かずしては、何事をも爲すを好まざりき。是、汝の善業にして、己むを得ざるが如くならず、篤志に由らしめん爲なり。』

彼が一時汝を離れしは、或は、汝が永遠に之を受けて、最早、奴隷としてには非ず、奴隷に優りて至

愛の兄弟と成さん爲には非ずや。我には殊に然ある者なれば、況て汝にとりては、肉身に於ても、主に於ても、然らん。されば汝、若、我を友とせば、彼を承容るゝ事、我に於るが如くせよ。彼、もし、汝に損害を與へ、或は、負債あらば、之を我に負はせよ。我、パウロ、手づから書記せり、我必ず償ふべし。汝が已を以つて我に償ふべき負債ある事は、我之を言はじ。然り兄弟よ、我は主に於て汝を楽しまん、請ふ主に於てわが腸を安んぜしめよ。

我、汝の従順を信じ、その爲さんとする所は、我が言ふ所に優れるを知りて、汝に書贈れるなり。さて、同時にわが爲に宿を備へよ。蓋し、わが身の、汝等の祈によりて汝等に與へられん事を希望す。ギリスト・イエズスに在りて、我と共に囚人たるエパラフラ、汝に宜しくと云へり。わが助力者たるマルコ、アリスタルコ、デマス、ルカも亦同じ。

願はくはわが主イエズス・キリストの恩寵、汝等の靈と共に在らん事を、アメン。』〔ファイルモン書、八一  
二五〕

この小書簡は、權威、丁寧、相手に好感を抱かせるやさしさ、諸謹、親しみ、大いなる愛徳を悉く備へて、書簡文として上乘の傑作である。假令、吾人のパウロについて知る所がたゞ此の一頁のみだつたとしても、彼の靈魂、及び、才能に關する吾人の評價は大いなるものであつたらう。

特に、彼の卓見は、主人と奴隸との關係を愛を以つて解決せんとする所にある。この解決法が實施せられたならば、淺ましい異教世界を忽ちにして樂園と化すべきものであつた。

當時の社會にも、奴隸の境遇を改善しようとの、多少の試があつた。紀元五八年には、ローマでは警視總監、地方では知事に對して、若し、奴隸が證據を具して主人の不正若くは殘酷を訴へたならば、之を受理せねばならぬ、と云ふ法律が發布された。

六一年、即ち、パウロに係る事件が未決であつた間に、ローマの市長、ペダニウス・セクンドゥスと云ふ人が、自分の奴隸の一人に殺害された。かゝる場合には、彼の家の奴隸は全部死刑に處せられるのが、從來の習慣であつた。ペダニウスの奴隸の數は四百に上つた。此の際、數名の元老院議員は、全部の殺戮に反對した。しかし、遂に舊派の議論が勝を占めて、老幼男女を問はず四百人の奴隸が、悉く、鐵叉、或は十字架による死刑を受けることに定まつた。市民等は激昂して處刑を妨げる爲に一揆を起し、さうになつた。ネロは四百の罪人の處刑場へ送られる道筋に、軍隊を配列して警戒するの止むを得ざるに至つた。〔タシトウス『年紀』〕

一部の哲學者（ストア學者）は、理論的に、奴隸の非平等性を否定するまでになつた。人間が他の人間の所有物である、と云ふ事實に對して怪訝を抱き始めたのである。

ネロに解放せられたエピクテトスはエパフロディトスの家に長らく奴隷であつた經歷を有したが、彼はストア學派一流の尊大を以つて次の如く云つた。

『自由人たらんと欲する者は、他人に關するあらゆる事柄について、全然、無關心であらねばならぬ。然らずば、彼は遂に奴隷であるのだ』と。

セネカはルシリウスに、己が奴隷等と親密にせねばならぬ、さうして、彼等と食卓を共にするまでにならねばならぬ、と勧めた。

『彼等は奴隷であるか。…否、彼等は人間である。奴隷か。否、運命の導によつて、汝も彼等のやうになり得ることを思へば、彼等は賤しい身分に生れた汝の友人、汝に仕へてゐる汝の同僚である。…汝が汝の奴隷と呼ぶ者は、やはり汝と同じ起源を有し、汝と同じ空を戴き、汝の如く呼吸し、生活し、死ぬのである。…今日、汝は自由であるが、汝が奴隷となり、汝の舊奴隷を主人とする日の來ない事を誰か保證しよう。…某は奴隷である。しかし、彼は自由の靈魂を有するかも知れない。一體、奴隷でない人が居るか。一人は淫樂に仕へ、他は野心に仕へ、第三は恐怖に仕へてゐるではないか。』〔書簡〕かく説いたセネカも、奴隷を解放する事には反對であつた。彼の説では、善い主人は奴隷に尊敬せられる。故に、彼等に對して親切な事は主人の利益なのだ。

聖パウロは、信仰に根ざし、超自然の世界を基柢とするだけ、もつと合理的の解決を下す。

『ユデア人もなく、ギリシヤ人もなく、奴隷も自由の身もなし。…それは汝等キリスト・イエズスに於て皆一人なればなり。』〔ガラチア書三ノ二八〕

イエズスは自ら奴隷の姿をとり給うた。何人にもあれ、一旦、洗禮を受けた以上は、兄弟である。彼が主人と呼ぶ人より、神の尊前に於て、劣ることはない。しかしながら、それは、奴隷が解放を強要する理由にならない。

『汝、奴隷にして召されたらんか、之を思煩ふなかれ、假令、自由の身となる事を得るも、一層（今の奴隷の境遇）を利用せよ。蓋し、奴隷にして主に召されたる者は、主に於ては自由の身となりし者、同じく自由の身にして召されたる者は、キリストの奴隷たるなり。』〔コリント前書、七ノ二一―二二〕

彼はまた主人と奴隷との關係について、實際的の教訓を與へた。彼は奴隷に、主人の面前に於てのみ服従せずして、キリストに仕へ奉るが如く正直と尊敬とを以つてせよ、と云ひ、主人に對しては、柔和、親切なれ、と命じた。

『彼等に威嚇を加ふること勿れ、そは、彼等と汝等との主、天に在して、人に就きて偏り給ふ事なしと知ればなり。』〔エフェソ書六ノ五一―五九〕

オネジモを識る以前にも、パウロは、もう一人、他の奴隷を愛した。それは、ローマ書の末文中に出てくるアンブリア、又は、アンブリアトと云ふ人である。アンブリアトは、恐らく此の人と推測する理由がある。「マルツキ」——ドミチルラの墓域中ノ聖堂に埋葬されてゐる。奴隷がかくの如き名家の死者と共に葬られてゐるのは、聖パウロに敬意を表する所以であつたであらう。

使徒は囚人となつてから、一層、『奴隷』と自分との間の近しいのを感じた。彼の兩肩は、彼等の多數の、そのやうに、幾條もの笞杖の傷痕を宿してゐるではないか。

しかし、囚人たるの境遇も、彼の福音の自由を妨げなかつた。むしろ鐵鎖に繋がれた後に、彼の權威の自覺は、益々大きくなつた位である。彼の使者は、斷えず東西に往復した。彼の言語は、引きつゞいて、諸國民の耳に語られた。靈の能力が束縛せられてゐる程、その擴張力は強くなる。パウロの鐵鎖は、ペトロの鐵鎖のやうに、世紀を通じて『獸』がこれを壓迫し、沈黙せしめ、根絶させ得ると信じてゐる時、益々強い、『教會』の靈的支配の象徴であつた。

(註一) この家が、現今、サンタ・マリア・イン・ヴィア・ラータの教會の存する地點にあつたとの古來の傳説は、今日では全く抛棄された。マルツキ。

(註二) トウセン『コロサイ書註釋』参照。

(註三) 本書はエフェゾでなくして、ラオディケ教會に宛てられたものである、と云ふのが最近の通説である。

ヴオステの註釋の序文にその理由が擧げられてゐるから、之を参照されたい。

(註四) コロサイ市は、フリジア州リクス河畔の町である。パウロの弟子エパfrasより福音を受けた。

(註五) オネジモとは『有益』の義、パウロは言の戯をするのである。

## 110. 殉教

パウロが、ローマで、クストディア・ミリタリーヌ下に於る囚人として過ごした二年間が、彼の生涯の判然とわかる最後の時代である。使徒行録も、その後の事に就いて、語る所がない。當時のキリスト教世界に直ぐ知れ渡る大事件の筈であるから、記者が、特に使徒の判決、並に處刑を秘したとは考へられぬ。(註一)我等にとつて不明な或原因によつて記録が突然に中止された、と見る方が穩當である。

その後のパウロの姿は、深い靄にとざされてゐる。我等は、時として、彼の聲を聴くけれども彼の行動を注視することは出来ない。フィリッピ書は、期待する所あるかの如く、近く、マケドニアにゆくことを豫告する。「二ノ二六」即ち、彼は、無事に放免されると信じてゐたのである。チモテオ、並びにチトに贈つた書簡は、彼が實際再び自由の身となつたのでなければ、充分に理解することが不可能である。

チモテオ前書は彼がマケドニアにいつた事を示す。「一ノ三」彼はチモテオに、自分が歸來するまで、其處で待つやうに命じてゐる。「三ノ一四、四ノ一三」チモテオ後書では、トロフレイモが病氣にかゝつた爲

に、これをミレトに遣したと云ふ。「四ノ二〇」チト書では、彼がチトをクレタ島に置いたのは「尙缺けたる所を整へ、且、我が汝に命ぜし如く町々に長老を立てしめん爲なり」「二ノ五」と語つてゐる。

是によつてみれば、パウロは、放免後、アカイヤ、マケドニア、アジアの各教會に戻つて、是等を訪問し、なほ、新たにクレタ島に布教し、チトを此處に止めて事業を繼承せしめたのである。

彼があつたやうに熱心に豫定してゐたイスパニア行は、果して實現したであらうか。又、實行されたとしたならば、何時頃であつたらうか。ローマのクレメンヌスは、パウロが「西の涯にまで到達した」と證してゐる。この證言は甚だ漠然たるものであるが、それはローマをさすものでなくして、イスパニアをさしたものと考ふべきである。イスパニアは、使徒が審判主の尊前に於て、

『全地は主の御名を聞きたり、主よ願はくは歸り來りたまへ』と云ふ事が出来る前に、行かんことを期した世界の涯であつた。

パウロがヘブレオ書を腹案し、或は之を筆記せしめたのは、やはり此の頃であつたらうか。聖書學者等はこの不思議な書簡を説明する爲に多數の假説を提出してゐる。此の書簡には冒頭の挨拶がない。それから、パウロの伴侶等に關しては、

『我等の兄弟チモテオは放免せられしと知れ、彼、もし速に來らば、我、彼と共に汝等を見んとす……』

イタリアの兄弟等、汝等に宜しくと云へり」〔一三ノ二三、二四〕

と、チモテオのことが簡単に述べてあるばかりである。

パウロ自身が此の書簡を記したならば『信仰上の實子』〔チモテオ前書、一ノ二〕として、自分の子のやうに愛してゐた彼のことを、このやうな冷淡な調子では書くまいと思はれる。

書簡の根本的思想は紛れもないパウロの説である。其の中には、彼の慣用的神學論、並びに比喩がある。

『萬物はキリストに服す〔第一章、第二章〕……汝等は固き食物ならで、乳を要する者となれり〔註二〕……』

律法は何事をも完全に至らしめず〔七ノ一九〕……わが義人は信仰によりて活く……』〔一〇ノ三八〕

又、文章の所には、使徒の特徴なる簡潔、勁拔な調子が表はれてゐる。

『血を流す事なくしては赦さるゝ事なし〔九ノ二二〕……汝等罪に對ひて戰ふに、未だ血を流す程に抵抗せし事なし〔二二ノ四〕……恐るべき哉、活き給へる神の御手に罹る事。』〔一〇ノ三一〕

特に、神の御言の働きを叙するあたりがさうである。

『神の御言は活きて效能あり。あらゆる兩刃の劍もろはよりも鋭くして、靈魂と精神と、又、關節と骨髓との境に達し、心と思と志とを分つ。』〔四ノ一二〕

しかし、全體に見て、ヘブレオ書はパウロの文章としては、あまりに華麗で、裝飾に富み、ソクラテスガ、デモステネスに、更にひろげたやうな文體である。もとより、パウロと雖も、對者の如何によつて、表現を變へる術を知つてゐたのだが、それにしても、これは彼の筆ではないやうだ。記者が信仰を論ずるに當つて〔第十一章〕舊約聖書中の例を盛に引用し、簡単な眞理を證する爲に『雲の如き證言』を蒐集するあたりは、どうしても修辭學者の文章である。即ち、此の書簡はパウロの直接の弟子か、然らざれば、パウロの影響を極めて多分に受けた人で、ギリシャ風の修辭學を學んだユデア人の筆になつたものであらう。(註三)

記者は、ユデアの反亂に先だつ頃、非常な動搖に遭遇したパレスチナの諸教會に此の書簡を贈る。教會をユデア教の軛の下に入れようとする努力は、此の頃、今までになかつた程に、はげしくパレスチナのキリスト教徒に對して行はれた。彼等の周圍には、猛烈な狂信ファンナチズムの嵐が吹いてゐた。さうして、彼等は、二途の中、其の一を選まねばならぬ場合に立至つた。即ち、狂氣の如きユデア人と化して、外國人の支配に反抗せんとする國民の運動に加はるか、然らずば、自ら郷土を棄て去るか、が、それであつた。(彼等は遂に後途を選んでペラに逃れて難を避けた。)

記者は信仰を棄つる勿れと彼等に勧める。其處には、不完全にして一時的の象徴に過ぎざるユデア教



の司祭職と、イエズス・キリストの司祭職とが比較せられる。イエズスは、缺くべからざる仲介者、永遠の大司祭である。司祭職の高貴に對する感激が、章句に漲る。さうして、嚴肅な文章の所々に、イタリアのキリスト教徒が殉教の期待を以つて昂奮してゐた感情のひらめきが見透される。

『汝等は、未だ血を流す程に抵抗せし事なし』と云ふ一句の裏には、我等は神の國の爲に如何なる事を忍ぶべきかを知れり、と云ふ言が隠れてゐる。

福音の先驅者等、十字架上にかゝり給ひしイエズスの豫言者等が凌いだ艱難の列擧は單なる修辭ではない。

『石に擲たれ、鋸にて挽かれ、試され、劍にて殺され、羊、山羊の毛皮を纏ひて萬事に缺乏し、責められ惱まされて流浪せり。世は此の人々を置くに相應しからざりしに、彼等は荒地に、山に、地の洞、及び、穴の中に彷徨ひしなり……』(一一ノ三七、三八)

全くパウロの口吻と等しい、完全な脱離の精神の叫なる對句もある。

『我等、此處にては、永存する都會を有せずして、未來のもの(都會)を求む。』(一三ノ一四)

パウロよりも、漂浪者のやうに此の世界に生きて、常に天上の都會を望み、之を地上に築かんと努力した者は他にない。此の時代に於て、キリスト教徒の希望を繋ぐに足る人間的都會が地上に在つたらう

か。エルサレムと神殿とは、將に滅亡せんとしてゐた。永遠の都と誇つてゐたローマは、四分の三ほど火事で焼けてしまつた。

紀元六四年七月十九日大競技場の傍にあつた油の倉庫から火が發したのだ。パラティノ丘を繞るローマの中心は六日間焼けつづけた。さうして、市の十四區の中、十區が全滅してしまつた。

帝國の四方に此の大慘事の報知が飛んだ時、パウロは果して何處に居たか。彼は定めてこれを天地を新たならしむる世界の大火事の前兆であると考へたであらう。

彼は『かの日』(チモテオ後書、一ノ一八、ベトロ後書、三ノ七)を待ちながらも、絶えず謬説と争ひ、無益なる争論、不規律、及び、異端を教會の中から排斥する努力を續けてゐた。

チモテオ前後書、並びにチト書は、倦まずして戦ひ、一步も退かず、時として無遠慮すぎる程の熱誠を示す彼の面影を傳へてゐる。しかし、その中には、最早、曇なき光明に近づいた靈魂の平和が看取される。

彼は、『自ら律法の教師たらんと欲して、其の言ふ所をも斷言する所をも覺らざる』饒舌漢(チモテオ前書一ノ七)ユデア主義者に對して一刻たりとも、戦闘をやめぬ。彼等『割禮の人々』は『贅辯を弄し、以つて人を惑はし……恥づべき利の爲に教ふべからざる事を教へて全家を覆へす』(チト書一ノ一〇、一一)

…中には人の家に潜入り、女等を擒にして誘ふ者あり、是等の女は罪を負ひ、種々の慾に引かる〔チモテオ後書、三ノ六〕…彼等は、ユデア教の寓言に憑り〔チト書、一ノ一四〕律法上の争をなす〔同上三ノ九〕』中には、彼が破門したヒメネオとフィレトのやうに〔チモテオ前書、一ノ二〇、同後書、二ノ一七〕甚しい謬説を唱へる者がある。彼等によれば、復活は洗禮に際して精神的に行はれるもので、肉身の復活はありうべからざる事であると。又、婚姻を禁じ、食物に、潔きものと不潔なるものとを分つ者がある。是等は敬虔を身體的苦業に歸せんとする輩である。又、使徒と異なる福音を教へる者がある。一旦、眞理が此の輩の口を経ると、忽ちにして變形してしまふ。如斯きは私利を志す人々なのだ。即ち利慾は一切の悪事の根である。〔チモテオ前書、六ノ一〇〕

パウロは、種々の弊害が成長すれば、あらゆる精神的社會中の最も聖なるものをすら、痿痺たらしめ得ることを知つてゐた。更に、彼はその結果を先見し、自ら己の智慧に誇る人々は『大いに不敬虔に進む』〔チモテオ後書二ノ一六〕ことを熟知する。それで、凡ての人間の集團に免るゝ事能はざる缺陷を救ふ爲に、彼は二ヶ條の對策を教へた。その一は、福音の原則に忠實なる事で、他は、模範的にして、且、堅固な教會組織であつた。(註四)

彼が建てた諸教會の主長は使徒自身である。彼は、己の權威を疑ふを何人にも許さなかつた。何故な

らば、彼は之を主自ら、及び、最初の使徒等より得たものであるから。時として、彼は、或教會を訪問せしめる際、チモテオ、チト、其の他の人々に一時的に之を預ち與へる。彼は道德堅固にして、健なる教に忠實な人々を選んで、長老或は監督として、各々の都會に立てる事を彼等に命ずる。長老等は、執事及び寡婦等の協力を受ける。かくの如くにして『託せられしもの(信仰)』は安全に守られ、〔チモテオ前書、六ノ二〇〕教會は聖靈を受け、且、之を繼承する正當な牧者によつて導かれることが出来る。

チモテオ前書と同後書との間に、ローマでは大迫害が勃發した。ローマのクレメンスは、如何なる輩がキリスト教徒の敵となつて、之を起させたか、と云ふ事を、陰に暗示してゐる。

『教會の柱たりし人々が迫害せられ、死に至るまで責められたるは嫉妬心によりてなりき』と。

ローマの火災はカペーナ門附近、及び、トラステヴェレ一帯を無事に残した。火元がユデア人町の近くであつたにも拘らず、それが焼けなかつたと云ふので、ユデア人がローマを滅して、總督の苛政に苦んでゐる在ユデアの同國人の爲に復讐をしたのだ、と云ふ巷説が擴まり、彼等に對する暴動が起りさうになつて來た。ユデア人等は、之を避けると同時に、平素から憎んでゐたキリスト教徒の上に一般の敵意を轉ずる爲に、イエズスの弟子等が放火したのだ、と流言した。皇帝ネロの側近では、ポペアを始め近侍のユデア人共が、帝に讒して、恰も宮中がキリスト教徒の士官、官吏、被解放者、奴隸で充ちてゐ

るかのやうに云ひ觸らした。

帝の臣下の中で、最も忠義を盡してゐるやうに見える是等の人々は、その實、背後に廻つて恐ろしい陰謀を企んでゐる。彼等はローマを滅ぼさうとしてゐる。この儘にすれば、早晚、皇帝も彼等に弑せられよう。

キリスト教徒が『人類を憎悪する』のを、帝は識らないのか。(註五) 彼等は、自然が人生に與へる快樂を否定する。彼等が祕密集會の席上で、云ふに云はれぬ醜行を犯すのを實見した者がある。殊に、彼等は十字架の刑に處せられた罪人を拜禮し、禁止せられた外國の迷信を宣傳し、神聖な皇帝に對して國家の法律が命ずる禮拜を行はない。

ネロが、故意に、火災を消させなかつたか否かは、別問題とするが、彼の夢想は新らしい。ローマ市の建設にあつたのである。此の災禍の後の慘狀によつて、市民の怨恨が彼に集りさうになつたので、帝は直ちに此の示唆を利用した。のみならず、彼は彼一流のやり方をして、芝居がかつた殘虐を行つた。

テルチユリアンは彼の言として、

Christianoi, non sint

『キリスト教徒は存在せざるべし』

と云ふ一句を傳へてゐるが、蓋し、眞に彼の口を洩れたものかも知れない。

帝が勅令を發して迫害を命じたのであらうか。とにかく、大仕掛の逮捕が行はれて、ろくな審問もなく、單に一遍の告訴により、或は、キリスト教徒なりとの自白によつて、多數の人々が處刑せられた。タシトゥスはその數を『無數』と記してゐるが、それを假りに二三千人と考へてもよい。とにかくネロ帝の計畫は見事に圖に當つて、民衆は注意をこれに集中し、大火災の復讐のつもりで、嫌疑者の拷問に喝采した。ローマの法律に従つて(註六) 放火犯人として、キリスト教徒は、生きながら焼かれ、或は、猛獸に與へられねばならなかつた。しかし、演戲好きの暴帝が此の町に案出し、實行した刑罰が、如何に洗練せられた殘虐だつたかは、何人も知る所である。一群の殉教者は、野獸の皮の縫ひぐるみの中で、演劇場で、哮り狂ふ猛犬に噛ませられた。ヴァチカンの庭園では、キリスト教徒は、松脂と硫黄とを塗つた衣服を着せられて、道傍の棒杭に縛付けられ、夜、活きた炬火となつて燃え上つた。暴帝は、その間を、自ら馬車を御して遊覽し、又は、しつらへられた舞臺に上つて、チトラを唱らしながら一曲の悲劇を唱つた。信者の若い女等は劇場に率かれて、ダナイデスに扮して、タルタールの苦を受けさせられたり、絞殺せられる前に公衆の面前で恥かしめられたり、或は傳説中のディルケのやうに暴牛の角に縛

付けられ、踏み殺され、撃き殺され、突き殺された。(註七)

迫害のあまりに残酷なのが、人民の憎悪心を満たす代りに、何時となく帝に對する批難と變じた。刑罰に處せられる人の中に、無辜の事が瞭な人々が、少なからずあつた。老人、少年、婦人等は、人間の力に堪へ得る以上の苛責を受けながら、はてしない苦悶の中に、忍耐の微笑を失はなかつた。彼等の勝利は、まづ見物人の好奇心を驚かし、次で、同情と不安との念をよび起した。彼等の刑罰の唯一の目的が、暴君、及びその一味の人々の眼を娛ますにある事が明になつたからである。

パウロが、ローマ教會の此の災禍と、兄弟等の名譽ある戦鬪との報に接したのは、東國に滞在中であつたらしい。それより先、彼はチトに書簡を贈つて、

『急ぎて(マケドニアの)ニコポリなるわが許に來れ、我、冬を彼處に過さんと決したればなり』(チト書、三ノ一二)

と云つてやつた。彼はトロアデに暫時、逗留したが、其の際、カルポの家に外套、恐らくは、彼のたゞ一つしかない外套を忘れて來た。(チモテオ後書、四ノ一三)

多少信用の出来る傳説によれば、彼とペトロとはコリントで落ち合つて、共に信者等を激勵する爲に、又、自分達もローマにて『榮冠』を受くべき事を悟つて、連れ立つて、イタリアに向けて出發した相であ

ある。(註八)

僞經、聖パウロ行録によれば、——但、その記載、歴史と小説とを區別することは困難である——

パウロは、ローマ市外のある穀物納屋を借りて、説教をしてゐた。ところが、密告者があつて再び逮捕せられた。しかし、今度は寛大とクストディア・ミリタリスではなかつた。彼はチモテオに、自分が『悪人の如く』鎖に繋がれたと云ふ。(チモテオ後書、二ノ九)オネジフォロはローマに來て、苦心の末にやつと彼を見出だした。(二ノ十六、一七)パウロは嚴重に監禁せられてゐたに相違ないのである。彼の舊友も、彼を識ると云はず、彼の禁個の場所すら不明であつた。

『小アジアに在る人々は皆我を離れたり』(一ノ一五)……わが初の辯護の時、我に立會ふ者一人もなく皆我を棄てたり。』(四ノ一六)

と自ら彼は云ふ。

彼は未だ、死期の迫つたことについての確信を有たない。彼は、既に一度、『獅子の口』より救ひ出された。(四ノ一七)『主は我を一切の悪業より逃れしめ給ひ、尙、その天國に於て我を救ひ給ふべし』(四ノ一八)と。これが、彼が確實に知る唯一の事である。チモテオは冬の前に、早く彼の許に來なければならぬ。その際、トロアデに忘れて來た外套を届けてもらひたい。

それにも拘らず、彼の口吻のうちには、何となく、チモテオに最後の訓戒を與へるかのやうな語氣がある。己が血を最後の犠牲の祀の爲に灌ぐ姿が、彼の眼前にあつた。『礎を揚げる時』は近づいた。パウロは牢獄の中で、大洋の微風を感じた。彼の船は、明日、天國の岸に着くであらう。

『我、善き戦を戦ひ、走るべき道を果たし、信仰を保てり。残る所は、正義の冠、わが爲に備はれるのみ。正しき審判者にて在す主は、かの日に於て、之を我に賜ふべく、而も欲り我のみならずして、その降臨を愛する人々にも賜ふべきなり。』(四ノ七、八)

彼の書簡の中でも、老いて益々信仰の旺な此の競技者が、倦み疲れたからではなく、戦に勝ちしが故に、競技場を去らんとするに臨んでの以上の數語より、なほ崇高な言葉を發見するのは困難であらう。

彼は一言以つて過去を偲ぶ。『我、アンチオキア、イコニオム、及び、リストラに於て迫害を忍びたりしが、『主は總て是等の中より我を救ひ出し給へり。』(三ノ一)今日は我は選ばれたる人々の爲に萬事を忍ぶ。これ、彼等をして、イエズス・キリストに於る救靈と天の光榮とを得しめん爲なり。』(二ノ一〇)彼は弟子チモテオに、始終變らざる彼の意志を想起せしめ、叱責し、批難せざるべからざる人に對しても正義、愛徳、柔和を忘れるなと命ずる。

彼の聲は、彼に墳墓の彼方、平和の失はるゝ事なき國より來るかのやうに響く。

同時に、彼は無數の將來の殉教者に、必要な勸告を準備した。シリィネの殉教者行録「註九」の中に、總督サトルニヌスが、被告スペラトゥスに『汝等の圖書中に如何なるものありや』と問ふと、スペラトゥスは『我等の聖書、及びパウロと云ふ聖人の書簡なり』と之に答へたと云ふ挿話がある。彼が刑罰の場に入る前の最後の食事として、彼等に與へしもの、如何に貴かりしよ。これで、カタコンブの壁面に描かれてゐる『競技者』の何人なるか判明する。恩籠によりて勝利を博して敗れし事なき闘士、恩籠によりて敗北を畏れたる事なき闘士の姿は、まさしく彼であつたのだ。

しかし、此のチモテオ後書を界として、彼の最後の日は、恰も暗い廊下の彼方に没するやうにわからなくなつてしまふ。彼の第二回目の訊問の委細は、世の終まで不明であらう。我等は僞經アポクリファによるの他ない。僞經アポクリファの著者は明に事件を創作したり、種々の場合を入れ替へたりする。

皇帝の近侍にパトロクレスと云ふ人がゐて、パウロの説教所だつた穀物納屋について、彼の説教を聽いた。此の人は納屋の窓に腰をかけて、地に墜ちて死ぬ。パウロは彼を蘇らす。さうして、駄馬に乗せて歸へす。パトロクレスは、全く健全な身體で此處を去る。

この話は、トロアデに於けるユチコの復活を扮本とした下手な摸倣である。しかし、その續の中には多少の實傳が混つてゐるかも知れない。

ネロは、パトロクレスの死んだことを聞いた。然るに、彼が生きて歸つて來たのを見て、吃驚してたじねる。

『一體誰が御前を活かしたのだ。』

『キリスト・イエズス。永遠の大王。』

とパトロクレスは答へる。

エルサレムの王とならうと考へてゐたネロは、「スエトニウス」メシア王國に関する東國の豫言者の言をいくらか聞いてゐたので、こゝに不安を覺える。

『そのイエズスは、あらゆる國を滅して、永遠の統治をする王か。』

パトロクレスは躊躇はずして云ふ。

『さうでございます。彼はすべての國を覆し、たゞひとり永遠に支配したまふでせう。』

此の時にバルサバス・ユストゥス、カパドキア人ウリオ、ガラチア人フェストゥス、いづれも、帝の側近の家臣であつたが、異口同音に叫ぶ。

『私共も、やはり、この永遠の大王に仕へまつる者等でございます。』

ネロは彼等を悉く鎖めて、亂暴な拷問にかけ、同時に、パウロと會衆とを捕縛する爲に百夫長をや

る。使徒がセザルの前に率かれて來ると、すべての人々がパウロの顔を見るので、帝は、

『これが首魁だな』

と叫ぶ。それから、引き續いて訊問する。

『御前は、何故ローマ帝國にやつて來た。御前は、何故、私の命令を聽かぬ兵士等を集めるのか。』

パウロは、その時に、次の返事をする。

『セザルよ、私共は凡そ棲む人のあるかぎり、何處へいつても兵士等を集めます。わが大王に仕へまつり度いと望む人を、一人も拒んではならないのです。貴君も、もし、その一人におなりになるならば、救済を得ます。此の大王は、いつか一日の中に世界を滅し盡されますが、貴君が御祈りになれば助けて下さいます。』

ネロが親しく使徒を訊問したと云ふ事も、決して、それ自身には、あり得べからざる事でない。皇帝は軍隊の首長の權を有するが故に、當然裁判權をも有するのである。又パウロが、帝に對してか、或は他の法官に對してか、主の來臨を告げたのも確實である。傲慢にして、權威を恣にする異教徒に對する時、パウロは、必ず、『恐るべき眞理』即ち、神は、時間によつて滅びる此の世の國の上に、唯一の不動不變の御國を顯はし給ふべし、と云ふ事を告ぐるを怠らなかつた。

しかし、彼が第二回目にローマ公判廷に立つた時には、ネロはローマに居なかつた。聖クレメンスはパウロが知事(複數)の下に受難したと證言してゐる。普通、ローマには、知事は一人であつた。しかるに、此の年——六七年——に、ネロはその數を二人と定めた。さうして、アカイヤ州に赴かんとして、華麗な旅行準備をして、春に出發した。さて、パウロが殉教したのは、傳によれば、六月廿九日である。ペトロの殉教は同年同日であつたとも、或はパウロの處刑と一年の間隔があつたとも云はれてゐる。

イエズスは、神秘的な御言葉で、ペトロに、如何なる死によつて先榮を得べきかを豫め告げ給うた。『汝若かりし時、自ら帶して好む處を歩み居たりしが、老いたらん後は手を延べん、而して他の者汝に帶して、その好まざる處に導かん』と。「ヨハネ二一ノ一八」

ペトロは身分の無い者として取扱はれ、主の御豫言通り、十字架の上に『手を延べ自分の希望で頭を下に倒磔刑に處せられた。ローマ公民なるパウロは、斬首と云ふ、やゝ人間らしい刑を受けた。

或傳によれば、彼は刑に處せられる前に、ペトロと共にマルメルティノの陰濕な土窖の中に投ぜられたと云ふが、果して眞であらうか。フォールムに近い此の牢獄は主として政治的犯罪人——例へばカテイリーナの一味徒黨の如き——或は、戦争の捕虜——例へばヴェルシンジエトリックスの如き——を収

容する牢であつた。

しかし、パウロがその中に禁錮されて、自由の日を待つてゐた牢獄も、これに比べて樂であつた筈はない。闇黒、臭氣、不快な動物、下水の洩れる爲の濕氣の中で、彼は、虱のたかつた檻樓に包まれたまゝ身動も出来なかつた。兩手は重い鐵鎖の爲に強直し、兩足は足枷の穴にはめられて鐵の棒で締められてゐたから。

門があいて、パウロが殉教の場に率かれていつた初夏の朝は、最も快い朝であつた。數時間の後に、彼は遂にキリストと共にすることが出来る。それは、單に、神秘的に主を所有する事でない。それは、ヨブが『我わが救主を面前見奉らん、我みづから彼を見ん、我にして他の者にあらず』、「ヨブ一九ノ二五——二七参照」と云つたやうに、面と面とを合せて、終なく主と共に活きることである。彼の魂と神との間に、もはや肉の障壁、沈黙の重錘はなくなる。此の世の光明の中に呼吸することは、なほ未だ快いが、しかし、彼は最早既に他の世界に棲むやうな心持で、地上のものより印象を感じてゐた。

彼の周圍の街路は眼をさましかけてゐる。兵卒の草履は數石に暴々しい蹻音を立て、拔身の劍は朝日に閃々と輝いた。通行人は、兩手を背後に縛られた、見すばらしい老人を好奇心と冷嘲との眼で見物した。彼は、警護の後から刑吏と笑ひながらついて来る劊手の聲を聞いたであらう。彼は、此の時すこし

もローマ帝國の勢力に就てなど、關心してゐなかつた。その勢力なるものは、かの凱旋門の一つの浮刻に現はれてゐる、敵を蹂躙する無表情、無慈悲の馬上の勇士の姿であつた。

彼は此の期に臨んでも、なほキリストに導くことが出来る靈魂を探し求めてゐた。彼の傍に歩いてゐた百夫長が、氣の毒さうな顔をして、彼を眺めたので、彼は主のことを話し出して見た。

『活ける神を信じなさい。彼は私、及び、すべて主を信する人々を、死者の中より蘇せ給ふのです。』と彼は云つた。(註九)

彼等は市の西南のオスチア門にむかつた。其處に、立派な一人の婦人が、ヴェールで顔をつゝんで、道傍で彼の來るのを待つてゐた。彼が近づくと、婦人は眼に涙を湛へて彼をみつめ、両手を合せて、彼に請うた。

『パウロよ、神の人よ、主イエズスの尊前に私を覚えてゐて下さい』と。

パウロは、信者等をその迫害の中に助けてゐる勇敢な貴婦人プラウチルラと知つたので、喜ばしげに彼女に應へた。

『今日は、プラウチルラよ、永遠の救済の女メリア。貴女の被つてゐるヴェールを借して下さい。手拭のやうにして、それで私の眼をかくして、キリストの御名によつて私の愛の紀念を貴女に残しませう。』

彼等は、テヴェレ河を渡つて、オスチア街道を進んでいつた。道の右は、後にコンスタンチン大帝が使徒の紀念として最初のバジリカを建てた所である。ルシナと云ふ信者の貴婦人が此處に別荘を有つてゐた。「マルツキ」其處から、なほ一哩ほど先で、一行は街道を離れて、丘陵の方へ這入つていつた。此の時、パウロが一瞬間、眼を舉げて、四邊を見廻はしたならば、彼は奇異な記憶を想起したに相違ない。西はサビーナ連山に仕切られて、南、海の方へと次第に低く展開する蒼茫たる平和な大平原の中を貫いて、テヴェレ河が緑の小丘陵の間を縫つて流れてゆく。それは、タウルス山脈の麓なるシリシア州の平原に似通つてゐた。

あゝ其處には他の河が靜に流れてゐた。……彼の眼前には幼年時代の記憶が浮び出て、また消えた。昔のサウロから、今、死に行く老齡のパウロへの距離は、タルソからオスチアへの距離よりも遠かつた。

太陽は重苦しく輝いて、道の埃は疲れた彼の眼を刺戟した。けれども、彼は勇ましく歩いた。ダマスコへの道から、どれほどの道を歩み續けたことだらう。さうして、これが最後の旅程なのだ。若いローマの兵卒に劣らぬ老兵士として、これを行き盡さう。戦場に斃るゝが如く、劍の下に死なう。處刑の地として定められたのは、人の居ない引込んだ谷間だつた。そこには、清冽な泉が湧いてゐた。



の *Pl. Aquae Salviae* (『よき泉』) と云ふ名がついてゐた。ローマの官憲が此の祕密の場所を選んだのは、使徒の殉教の光景が、キリスト教徒にはげしい熱狂の火を燃やすことを畏れたのであつた。

護衛の兵卒は、やがて、一本の松樹の傍に立ち止つた。パウロは、百夫長より最後の用意をする許可を得た。彼は、東の方、即ち、先祖等の聖き都の方を向いて立つて、手を延ばして祈つた。周囲の人達は、彼がヘブレオ語で、目に見えぬ何人かに對して物言ふのを聴いた。必ずや、彼はもう一度、遠い過去の罪を思ひ出したに相違ない。彼はその赦を乞うた。それを既に得てゐたとは信じながら。又、彼はことにイスラエルの救の爲に、彼が建てた各地の教會の爲に、すべての教會の爲に、又、將來の『教會』の爲に祈つた。

宣告書には、慣例に従つて、斬に處せられる以前に、笞を受けねばならぬ旨が記載してあつた。それで、彼は、既に無数の笞をうけて拉がれ、肉を削がれた兩肩を再び笞の下にさし出した。すべての彼の戦勝は、石柱に録せられたものやうに、聖い傷痕となつて其處に残つてゐた。

それから、彼は、プラウチルラのヴェールで眼をかくし、跪いて、黙つて首をさし延べた。渴いたローマの土が灌がれた供物の鮮血を呑んだ。

數名の信者、敬虔なる婦人等は、丘陵の上より、この犠牲に與つてゐたに相違ない。ルシナもその中

に居たであらう。是等の人々は聖い遺骸をルシナの別荘に運んで來た。遺骸は二五八年、聖ペトロのそれと共に、アツピア街道の墓域に移されるまで、其處にあつた。さうして、第四世紀になつてから、使徒に獻げられたバジリカ、即ち、サン・パオロ・フォレ・ムーレの祭壇の下に遷された。

私は、ある夏の一日、其處からトレ・フォンターネ(『三つの泉』)まで、彼の殉教の道筋をたどつた。私は、秋になつてから、もう一度、喜悅んで其處に行つてみた。此の郊外は、いまだに古昔の開けなかつた頃の面影を存してゐる。丘陵の形は、その時とすこしも違つてゐない筈である。右の方には岡上の松林と、其處此處に點在する田舎家と、一個の赤褐色の塔と、緑色をした丘陵の尖端との間に、テヴェレ河が、シドヌス河のやうに紆曲しながら、廣い平野の中を靜かに、海に流れ落ちてゐる。二個の里程標を過ぎてから、道の下には、ユーカリ樹と夾竹桃との叢林を横斷する靜な小逕がついてゐた。

谷間には、三個の小聖堂が、かたまつてゐる。その一つは三つの泉を記念するものであるが、我等の知れるパウロの愛しさうなものでない。三つの泉は、現在では、この聖堂の内部にあつて俗悪な黒大理石の碑がそれを示してゐる。聖堂の床には、四季を現はす大きな古代異教のモザイクが嵌めてある。一隅の格子の中には、劊手が切る時に、使徒の頭をそれに支へさせたとの傳説がある、小さな柱が置いてある。

しかしながら、これらの虚偽の裝飾を悉く忘れて、此の地の自然の中に冥想する事は容易である。聖堂も、溪谷も、我等に永遠なるものゝ姿を偲ばせるに足る静寂の氣に充滿してゐる。トラピスト修道士が、此の附近に修道院を建てた心持も、よくわかる。それは熱病の源なる卑濕の地を乾して、これを健康地にするよりも優れたことなのだ。彼等は其處で神祕の存在を、祭式を以つて表現するのである。隠者パウロは此の隠れ家を喜ぶであらう。我等が此處で發見するは、隠れし神の異象に基いて、自分の教と行動とを定めた觀想家、又、古來の傳説の傳へる姿、劍を執る聖者である。

パウロの肖像を見れば、悉く刀尖きつさきを地に向けた劍を有つてゐる。劍は彼の殉教の器であつた。又、それは双刃の劍よりも鋭い彼の説教の象徴である。私はたゞ一人、彼を憶うて祈禱した。此の劍に觸れられんことの願望が何時、私の内部に成長するであらうか。何時、此の劍が私の關節と骨髓との境に達し、靈魂と精神との秘奥に届くだらうか。蓋し、彼の殉教が與へる唯一の智識はキリストに於て生くる爲に、自己を棄て、主と共に死ぬことにあるのであるから。

- (註一) ロスジールは、使徒行録の『編纂者』が、何かの理由があつて、わざと省略したのだと稱するけれども。  
 (註二) 五ノ一二、この比喩はパウロが作つたものであるが、人々が好んでこれを用ゐたことは、ペトロ前書の二ノ二でも窺はれる。

(註三) 筆者をバルナバとする、傳説がある。アラ『聖パウロの神學』参照。

(註四) 假令、組織として未だ單純であつたらうが。

(註五) タシトウスは、此の『人類の憎悪』と云ふ、漠然たる批難を記してゐる。キリスト教徒は、家族、國教、並びに國家を破壊する。彼等は祖國を有せざる無政府主義者、一種の虛無主義者である、と云ふのである。

(註六) ムウレ『キリスト教起源史』

(註七) 聖クレメンス書簡参照。

(註八) ユウゼビウスは、コリントのディオニジウスの稍不明瞭な證書を引用してゐる。曰く『ペトロとパウロとは』コリントに来て、我等に教へた後に、同道してイタリアに向けて出發した。さうして、ローマ人等よ、彼等は、汝等に我等の如く教へてから、殆ど同じ頃に殉教した』と。

(註九) 彼等は一八〇年七月、カルタゴで裁判を受けた。

(註十) この挿話、及び次に記するものは、悉く偽經によるのである。

## 二、聖パウロの面影

## 人間として、聖者として

彼の生涯の種々相は——我等の知るその一小部分が——恰も彩色窓硝子の周囲の菱形の中にあるやうな、特色ある光景の一團をなしてゐる。

石を擲つ人々の外套を預るサウロ、途上に倒れてゐるサウロ、魔術者エリマを盲目にするパウロ、犠牲の獸を連れて來た祭司等をバルナバと共に叱咤するパウロ、アレオパグの丘陵に立つパウロ、アントニアの砦の前、又は、衆議所の廣間に於るパウロ、焚火の中に蝮を拂ひ落すパウロ、松樹の傍に跪いて創手の刃を受けるパウロ、すべてが極めて特異な、他と混同することの出來ぬ姿である。如何なる傳説と雖も、これ程活々とした、眞實味に富んだ場面を作ることとは不可能である。

しかし、さて、窓硝子の中央に、彼の深奥な生命の本質を現はす肖像を嵌めようと思ふと、比類ない此人格の偉大さ、複雑な統一に驚かざるを得なくなる。

『將來他の聖パウロはないであらう』と彼のあまたの註釋家の中でも最も優れた人が云つた。(註一)使徒にして博士なる尊き、アウグスチノ、ベルナルド、ドミニコの如き人々さへ彼の側では、あまりに豊富な手本の、不完全な模寫としかならなくなる。

彼の面貌は、非常に複雑な、さうして優れた性格を聚めてゐる爲に、如何なる塑像と雖も、此の全體を表現するを得ない。

聖ペトロと相對する彼の、第二世紀の浮彫像は、高い鷲鼻と、はげ上つた廣い額と、飛び出した平凡な眼と、活動力に溢れて、神祕的の深さのない、傳統的の型とをしか表はしてない。

レンス市の大聖堂の塔の一つに彫刻してある聖パウロは(註二)見神者の豫言者の威風、超人的靜寂を示す傑作である。空虚なる眼の光は、内部の、何か不變不動のものを見つめてゐるやうだ。しかし、此の像には熾烈なる愛と激越さが無い。

ブルジュ市にある第十三世紀の彩色窓硝子は、愛に溢れ、神の奧義に酔ひしれたるパウロを現はしてゐるが、其處に使徒として傳導者としての熱情を求めても、それは無駄である。

フラマン派の一人、フーゴー・ファアン・デル・ゴエスは、一四六八年に刻んだ木像の中に、「これはルヴェン市にある」パウロの面貌の二方面を捉へ得た。顔の左半は嚴格な素朴さを表はし、右半は眼光

と筋肉の働きとで、柔和、慈悲の相を示し、固く結んだ唇が、左右の表情を調和する。

ルネッサンス以降は、フィレンツェにあるヴェロネーズの明るい肖像を除く他は、殆どみな彼の光輝を暗くした。ラファエル、レムブランド、グレコさへも、陰鬱な、嚴肅な、恐ろしいパウロを描出した。デューレルは狂暴な異端者のやうな凄じい眼光を彼に與へた。

近代の藝術家では、モリス・ドニーとジュネーヴの壁畫フレスコとを除いては、彼に特殊の靈感をうけた者は一人もない。

ペトロとヨハネとは、一人は痛悔者、他は觀想者として、單純な思想から出た型を、我等の想像力に示すのみであるが、パウロの表情は極めて變化に富む。それだから、屢々、紛れもない彼に對つて、これは彼でないと言ふ事がある。迫害者サウロは、恍惚たる脱魂の境にあるパウロと似通ふ點なく、ガラチア書のパウロはテモテオ書のパウロと全く異つてゐる。

しかしながら、聖者の變容にも拘らず、我等の前なるは、まさに同一人である。

彼の性格の中に、すべてを通じて、はげしい感激がある。しかし、それは、衝動的ならずして、自分の信仰の原理に支配されたドグマチックの感激である。彼は自分が信すると共に、他人も亦彼の如く信じ、彼の如く生き、彼の如く眞理に事へねばならぬと要求する。聖寵が彼の内部に此の性癖を作つたの

ではなく、彼を豫定し給ひし時に、神の彼に賜ひたる能力が、聖寵に服従したのである。

彼の缺陷さへも、主の定め給うた目的に資した。彼の感受性の鋭敏さは、彼をして變り易からしめ、彼の激しい感情は、彼に反抗するものを打破せしめ、彼の強烈なエネルギーは、官能的の慾求をさへ追はしめたかも知れぬ。確信に向つて猪突する心には、狂信に捉はるゝ危険が存した。すぐれた辯舌は、彼を詭辯家としたかも知れない。

しかしながら、正しい事業に用ゐられた爲に、彼の活動慾、果敢心は、福音の行程を急がせた。彼の決斷力は、彼をして必要な場合に、古の律法の羈絆を破らせた。彼の確信は不決斷者を彼に屬せしめ、爭論に不安を感じた弱者を統一した。彼の巧慧は、改心せしむべき國民、説教すべき誤謬に對して、最も適當な手段を發見した。彼の肉體上、精神上の弱さは、彼の謙遜をたすけた。彼は自分の肉身に苦しい争闘を経験した人として罪に就て語ることが出来た。

パウロは、何よりも、極めて鞏固なる意志を有し、自ら指導者たるの天分を所有した。もしも彼がユデア教に終始したならば、イスラエルを回復せんとして、國家の滅亡を早めた、失望の勇士の一人となつたであらう。

彼の頭領たる眼識と手腕、なすべき事を達見して、その爲されざるべからざる所由、なし能ふべき所

由を、他人に呑み込まず能力を有つてゐた。彼は模範を以つて教へた。彼は勞働の爲に荒された自分の手を、信者等に示した。彼は、また、『飢餓何物ぞや、笞杖何物ぞや、陸路、海路の難何物ぞや、神の御扶けの下に我は、すべて之を冒したり。我を模範とせよ』と云へる權利を獲得した。

彼の勇氣は、我等の弱さをして瞠若たらしめる。如何なる冒險家と雖も、使徒の大膽に比すべきものはない。彼の勇氣の拍車は、『勝利の精神』であつた。彼は競技場の彼方の榮冠を望んだ。彼は『空しく走らず』して、必勝の目的を見失はず、偏へにキリストの榮光の爲に努力した。これが彼の比儔なき忍耐の祕訣だつた。凡ゆる人の中で最も性急なる彼が、萬難の裡に希望を失はざりし忍耐は、奇蹟の中の奇蹟とも云へよう。

パウロの特徴は、明快なる悟性が、その意志に使役せられた點である。ソクラテス、セネカにも優つて、彼は自分の靈魂の内部を省みた。

『我、之を知れり、善は我に、即ち、わが肉に宿れるに非ず、そは、志す事、我に近しと雖も、善を全うすることを得ず、志す善は之を爲さず、厭ふ惡は却て之を爲せばなり。』〔ローマ書七ノ一九〕

その心算でなくして、彼はすぐれた心理解剖家なのである。彼が内部の世界を檢驗するは、決して傲慢や、好奇心によるのではない。彼は自分の孱弱さを、神の完徳と比較し、信仰の燈火の前に、自己の

良心を省みる。かくて、忽ち、自分の弱さの中心と、自分の能力の源泉とを發見する。

心理解剖家以上に、パウロは論理家である。彼には、自分の思想を、一の原理に結び付ける必要があつた。結び目は、時によると、非常に固くして、解きほぐすことが困難な位であつた。思想の推移を明にし、一の思想を二つにも四つにも切斷して、段落に平衡ペランを與へるのは、修辭學者に委せて、彼は、直觀的に推理し、或は、ユデアのラビのやうに、紆曲する難解の手法を用ゐ、前提より晦澁な道程をたどつて意外の結論を導き出す。時として、彼も、假想の一人物を拉し來つて疑問を發せしめ、次で、之に解答を與へると云ふ、ギリシヤ學者慣用の辯證法を採用するが、それは決して修辭的興味シナゴグの爲ではない又、時として、議論を劇化することもあるが、それも脚本を書く爲ではない。彼は、屢々、ある眞理の論廓だけを書いて、説明を略してしまふ。次の事を記する爲に、あまりに性急なのだ。彼の論理は、それ自身が目的でない。説得し、勸告し、人々の心を變へて、それを神に向はしめるのが、彼の意圖なのである。

パウロは、一個の神祕的論理家である。彼は、その改心前に於て、既にさうであつた。彼がヘレニストのユデア人の前で、ステファノに對してとつた態度は、後に、諸教會に於て、ユデア主義に對してとつた態度と同様であつた。即ち、頑な愛情を以つて全力を盡して、會堂シナゴグを防衛したのである。

神は、この渾球に一大動搖を興へる、大熱情漢の一人として、彼を造り給うた。最初の中、彼の情熱は、目的を取違へてゐた。しかし、聖靈によつて、それが擴張せられ、輝照せられた時、彼の愛の勢力は、最頂點に達し、キリストの贖罪の後に、人の靈魂は如何なる程度まで反跳することが出来るかを我等に示した。

彼は非常に強い自我の意識を有し、これは一見聖徳への道を鎖してゐるかのやうに見えるから、彼が聖者たり得たと云ふことは、極めて不思議なことなのである。聖徳に達した人は、自己に生きず、自己の爲に生きない。自己の全生命を神の生命に服せしめ、之と一致せしめるのが聖者である。パウロに於ける奇蹟は、彼が偽ることなく、

『それ、我は活くと雖も、最早、我に非ず、キリストこそ、我に於て生き給ふなれ』〔ガラチア書二ノ二〇〕と云へた事實である。

さうして、その癖、彼は眞實の人生の孱弱さと、高貴さとを所有する彼自身たるを止めた事がないのである。

彼がキリストの奴隸となれば、なる程、それだけ、彼は、強くなり、自由となり、彼自身となる。彼は、ユデアの一階級を支配する代りに、その勸告を以つて、東西を指導し、やがて、全世界に及ぶべき規範を確立する。

彼は、ラビの學識、哲學者の世間的智慧を侮蔑した。しかし、彼が或は天啓より、或は他の使徒等より受けた智識は、望むが儘に彼に把握し盡す能はざる智慧の寶庫を開く。

嘗て、彼はイスラエルに於る狹義の兄弟等を愛した。しかし、今や、彼の愛は信者、不信者の靈魂を抱擁し、愛しうべき一切を神に於て愛する。

嘗て、彼は、亂暴し、破壊する爲に苟且の權力を揮つたが、今や、神は彼にその全能の一部を頒ち給うた。彼は悪魔を追ひ、病者を痊し、死者を蘇らす。

牢獄の石壁、彼を繋ぐ鐵鎖は、假令彼を生者の世界より葬り去るとも、彼の言は更に自由であり、從來よりも、なほ一層有効である。

彼は地上の喜悅、人間の正義しか知らなかつた。今や、彼は第三の天に導かれて、永遠の正義の勝利、想像するだに不可能なる幸福の充盈を待つ。

すべて、是等は、パウロの特權ではない。洗禮によつて、父の御國に入る者は、何人たりとも彼の如く世嗣である。パウロは主を獨占しようと思はない。それどころか、彼は萬人の救靈を希望する。彼は卑賤しき者の中に最も卑賤しき者、使徒の末席を占むる者、月たらずの流産兒、罪人の中の最も大なる

者と考へる。彼が誇るところは、たゞ受けた答鞭の數々、限りなき困厄迫害のみであり、彼は是等によつて、その模範とする主に似通ひ奉ることを知る。

しかしながら、この謙遜と同時に、彼は自己の使命に關する確乎たる自信を有する。彼はキリストとたゞ一個のものとなつて、己が名によつて獨斷し、自己を模範として人々に與へ、自己の才能を悉く展示する。

粗暴と柔和、權威と謙遜、冷嘲と柔言、躊躇することなき決斷力と極めて慎重なる考慮、精神の自由と服従、神祕的觀想と實際的智識、傳統への忠誠と未來へ向つての飛躍、すべて是等の相似ざる、否、時として、矛盾するが如き性質は、彼の行動、及び、教説の裡に於て調和されてゐる。此の偉大なる智慧者は、最も慈愛に充てる宣教師であり、此のユデア人は、最も全世界コスモポリタンなる神學者である。

脱走した奴隸オネジモの爲に、フィレモンに書簡を送るパウロは、人間らしい親切の模範である。

自身にとつては死を希望せしめる理由と、兄弟等の爲には、なほ生きんことを望ましめる、より大なる理由とを、比較商量するパウロは、超自然に生きるキリスト教徒の最高の典型である。

完全なる人間、完全なる聖者とは如何なるものかとの問は、他の何人よりも、パウロの生涯に於て、その解答を見出す。如何なる徳が彼に於て劣れるかと尋ねるのは無益である。あらゆる徳が、不思議な

諸調を作して、彼に於て實現する。さうして、彼は、偉大なるにも拘らず、我等を遠く離れない。人間としての本來の性癖は、徳と化して、彼の裡に残つてゐる。此の聖人は孱弱さを通じて、我等の兄弟である。彼の個性は、何一つとして失はれない。彼は、光榮をうけてキリストの肖像すがたに變じたる選ばれし人々が、如何にして、その最初の生命の輪廓を保つかを、我等に理解させてくれる。

(註一) 聖ヨハネ・クリソストムス。

(註二) 南の塔の南面の第一龕。

## 萬國の教師

彼の神學は實に偉大である。如何なる註釋書と雖も、その内容を悉く盡すことは不可能であらう。彼の教説に關して、最も驚くべきは、それが極めて明確なことであつて、模索の末に順次に形成せられ、或は、種々の異分子を集成して組織せられたものである、等の假説を容るゝ餘地が全然ない事である。彼の神學の根柢は原罪の教理である。原罪の觀念はユデア教的神觀、即ち、舊約聖書より發する。「註一」原罪の玄義は、その結果に於て、吾人の經驗の範圍内に入り、そのみを以つてしても、救済の必要が明になる。凡ての人類は、悉く一の肉であつて、アダムの遺産なる、惡に對する傾きを傳へて

ゆく。しかも、このアダムは、種々の意味に於て、將來のキリストの前表であつた。(註二)

人類は原罪を贖ふに足る物を缺いてゐる。贖罪者はどうしても必要であつた。人間の中に神の像を再び作ることを得る者は、受肉によりて被造物と結合し給ひし神自身だけである。キリストは萬物を和睦せし給うた。しかしながら、奴隸を救はんが爲には、彼自ら奴隸の姿をとり給ひ、死、しかも最も恥づべき死に至るまで、御自らを卑しめ給うたのである。この卑下は、豫言者等によつて告げられ、イエズスの生涯に於て實現せられ、その弟子等によつて繼續せられる。主が復活し給うたのは彼と共に我等もまた蘇らせられんが爲、即ち、彼の能力を顯はさんが爲のみでなく、人類が彼に於て、又、彼によつて、永遠の生命に與らんが爲であつた。此の生命は、神の純粹なる賜で、これを至福とも、又、聖寵とも云ふ。即ち、悟性の中に眞理を識る能力を、意志の中に善を遂行する能力を注がれることである。

假令、パウロ無くしても、我等は救済の確信を有するであらう。彼が我等に告ぐる所は、我等は、福音書により、及び、教會の教示によつて、之を學ぶを得るであらう。しかしながら、彼は既に吾人の有たる是等の本質的概念の上に、奇しき光明を注いでくれる。彼の言は天才の直観である。

『神の賜と召とは、取消さるゝ事なし。』(ローマ書、一一ノ二九)

『一人の罪の爲に、死はその一人よりして王となりたれば、況て溢るゝ程の恩寵と義の賜とを蒙る人々

は、一人のイエズス・キリストに由りて、生命に於て王となるべし。』(同上五ノ一七)

彼がキリストを目して、體なる教會の頭なりと做す時、彼の言は象徴以上であり、彼は重力の法則よりも、もつと眞實な超自然的事實を示説するのである。頭より四肢に生命の通ふが如く、キリストよりも、我等に、充ち溢るゝ靈の生命が流れてくる。

『彼は光榮の中に彼と一致する至福なる靈の頭である。愛によつて彼と一致する聖者等の頭である。愛を有せざれども、信仰によつて彼と一致する罪人の頭である。又、彼は、現在に於ては未だ彼と一致してゐないが、神の豫定によつて一日彼と一致すべき未信者の頭である。更に、彼は實際には決して彼と一致しないであらうが、彼と一致する可能性を有する者、例へば、神に豫定せられずして、現今、地上に生きつゝある不信者の頭である』(註三)

神の豫定とよ。星斗燦爛たる夜の夜空を仰ぐ人が、眩暈を感じざるが如く、パウロは、悲痛な、しかも、平靜を失はざる眼を以つて、此の玄義に臨むのである。彼は、神の正しきを知る。神が神たる以上如何でか、之を疑ふを得よう、すべての靈魂を創造し給ひし神は、萬人の救靈をのぞませ給ふ。肉の奴隸たる人は、靈によつて、信仰と愛とに於る自由を享ける。何故に、明なる功績を有せずして、或人々が此の特權を與へられ、他の人々が排斥せられるか。陶土は、己を恥辱の器とする製陶師に、その理由



を反問することが出来ぬ。パウロは頑なユデア人のことを思ふ。暗黒が彼等の所有である。しかし、神がその原因であらうか。彼等は光明を嫌ひ、之を蔑り、之を滅せんと計る。それにも拘らず、光明は彼等の上に輝いてゐる。不信者に至つては、律法をだに有しないが、彼等は律法なくして裁かれるであらう。此の世に来るすべての人を照らす、自然の光明の存するが如く、彼等は自己の律法である。

パウロは、義人の幸福なる生涯に三つの時期を分けた。彼は、神の選擇によつて豫定せられ、己が信仰の所業、並びに、兄弟等の善業によつて義とせられ、最後に光榮を享ける。彼は、全教會の靈體に連なり、諸聖人の通功にあづかり、祕蹟の功力によるに非ずしては、この光榮に入ることが出来ぬ。

使徒が『キリストの御苦の缺けたる所を、御體なる教會の爲に、その肉體に於て補ふ』時、『コロサ書、一ノ二四』彼は、キリストが、彼に代つて、苦み給ひしならんとする所を、忍ぶのではない。彼の心持は、彼が師にならひ、師の如く苦む時、その功德の効果は全教會に及び、救靈の業が、此の神祕的結合の能によつて、更に廣くなる、と云ふのである。

すべて是等の教義が、パウロの口に上る時、決定的權威の調を帯びる。それは、彼の經驗、即ち、彼が確實に知る神的、或は、人的事實に結び付けられるからである。

しかしながら、現代の社會にとつて、かくの如きは、悉く、死せる眞理である。異端的、或は新異教

的哲學は、人性の墮落なる概念に代ふるに、人は生來善なりと云ふ、最も誤れる原理を以つてした。神の豫定の思想は、畸形化して、一種の運命論となり、人間をして最も緊張なる未來について無關心たらしめた。靈肉の戦も單純になつた。肉が再び人間の主となつたので、靈は之に事へ、自己を否定すれば、もう、それでよくなつたのである。諸聖人の通功の思想より退化して、社會を、全然、物質的に解釋し、人間を目して、自分が何であるか、自分は何を欲するか、と云ふ事を全く知らずして、單に外部より壓迫されてゐる、無自覺なる原子の集團と見做すやうになつた。

パウロは、今日、過去に於るよりも、なほ貴い『萬民の教師』である。諸國民は、再び彼について、救済の要件を學ぶ必要がある。

その時、彼は、罪の價は死であること、彼等の死ぬは、如何なる病によるかを説明するであらう。彼の神學の内に含まれてゐる論理は、彼等に唯一の恢復の途を示すであらう。『キリストの裡にキリストに隨ひて生きよ』と、人々に告げる時、彼は彼等に、一切の力、一切の喜悅、一切の德行を教へるのだ。彼が示す模範は、隱修士の爲ばかりでない。彼のキリスト教は社會的である。彼は婚姻に關して、最も高貴にして、且、最も常識的の言を云つた。彼の眼には、夫妻の愛は、キリストが教會に一致し給ふ玄義の象徴である。夫は『キリストも教會を愛して、之が爲に己を付し給ひしが如く』〔エペソ書、五

「二五」妻を愛さねばならぬ。妻は『主』に服従するが如く、夫に順はねばならない。彼も、キリストの欲し給ひしが如く、婚姻を聖にして解きがたきものと考へる。但し、彼は、此の制定の聖なるを證明する爲に、彼以外の者では到底發見し能はざりしやうな、深遠な理由を發見する。

主人と召仕との關係については、彼は一方に親切を命ずると共に、他方よりは、『事ふること人に於てせず、主に於てするが如き』正直と誠意とを要求する。

官憲に對する義務としては、『人各々の上に立てる諸權に服すべし。蓋し、權にして神より出でざるはなし……權に逆ふ人は神の定に逆らふ』(ローマ書、一三ノ一、二)と教へる。

彼はまた各人に、他人に迷惑を掛けぬやうに、糧の爲に自ら勞働する事と、貧困者に施與をなす事とを命ずる。勞働の分業と、生活の規律と、權威とは、超自然的意味からして、必要な要定だと、彼は思つた。

さうして、すべての是等のものゝ上に、彼は異教世界の知らなかつた謙遜、並に、愛徳の二徳を冠した。すぐれたる詩人パウロが、此の後者を讚美した歌は、我等の人類愛論者や、自分自身に満足しきつてゐる慈善家の耳には、何等の魅力もないかも知れない。しかしながら、それは、假令、年代を経て、又、いくら人々の耳に熟してしまつても、天國の扉の彼方で唱はれるものゝやうな、神聖なる清新

味を失はない。

『我、假令、人間と天使との言語を語るとも、愛なければ、鳴る鐘、響く鐃の如くなりたるのみ。

我、假令、豫言する事を得て、一切の奧義、一切の學科を知り、又、假令、山を移す程なる一切の信仰を有すとも、愛なければ何物にも非ず。我、假令、わが財産を悉く貧者の食物として分與へ、又、我身を焼かるゝ爲に付すとも、愛なければ聊も我に益ある事なし。

愛は堪忍し、情あり、愛は妬まず、自慢せず、驕らず、非禮をなさず、己の爲に謀らず、怒らず、惡を負はせず、不義を喜ばずして眞實を喜び、何事をも包み、何事をも信じ、何事をも希望し、何事をも忪ふるなり。

豫言は廢り、言語は止み、知識は亡ぶべきも、愛は何時も絶ゆる事なし。蓋し、我等の知る事は不完全に、豫言する事は不完全なれども、完全なるところ來らば、不完全なるところは廢らん。我が小兒たりし時は、語ることも小兒の如く、判斷することも小兒の如く、考ふことも小兒の如くなりしかど、大人となりては小兒の事を棄てたり。今、我等の見るは、鏡を以つてして朧なれども、かの時には、顔と顔とを合せ、今、我が知る所は不完全なれども、かの時には、我が知らるゝが如くに知るべし。今、有するものは、信、望、愛、此の三なれども、就中、最大なるものは愛なり。』(コリント前書第十三章)

この一節の中で驚嘆すべきは、神に對する飛躍の中に無限と云ふ感覺を與ふる點である。而して、何故に、パウロはキリストの御母を認むるが如く、『愛』に不朽の寶冠を獻げたか。愛は萬事の源である。神と世界とを一致せしむるものは、ひとり愛のみである。この一致は、汎神論者の夢みるやうな盲目的一致ではない。之に反して、自由にして意識せられた一致、然も、被造物は光明の天父の御懷の裡に於て、自己の被造物たるを忘れず、故に、その富を汲み盡すこと能はざる一致である。

現在に於ては、人類と被造物とは、此の一致を待ち、『神の子等の光榮の自由』に與らうとして、朽つべきものゝ奴隸たるを脱れんとしてゐる。自然は相共に嘆き、陣痛の苦に遇つてゐる。聖靈の最初の賜たる我等も、救濟を待ち望んで、死すべき肉體の律の下に歎いてゐるのである。〔ローマ書八ノ二一―二三〕罪は宇宙に陰影を投げかけた。失はれた秩序の悲は、動物世界、物質世界の上にも及ぶ。されども、『主、イエズス、其の能力の天使等を隨へて、天より顯れ給ふ時、即ち、焰の中に於て、神を知らざる人々、わが主イエズス・キリストの福音に従はざる人々に報い給ふ時』〔テサロニケ後書、一ノ七、八〕仇敵、即ち、死は遂に滅ぶのだ。選まれし民の靈肉を粧ふ光榮は、新しき天、祝せられし地の面に反映する。かくて、神は萬人の爲の萬事となり給ふであらう。

パウロは、最終の一致の豫言者である。

かの『大いなる日』の期待は、自分がキリスト再臨を見ざるこの確實な場合に於ても、彼の希望の奥底に潜んでゐる。死の彼方にては、キリストと共にあるべしとは、彼に一點の疑もない。しかし彼は、自分一人の救靈に満足しない。彼は、イスラエルの改心、審判主の來臨、不義の終、平和の完成を待ち望む。

彼は希望の人である。しかし、彼はその理論を教へたのではない。彼は、僞兄弟として扱はれ、辱められ、鞭うたれ、石を擲たれ、鐵鎖に繋がれても、希望することを止めず、火の如きその兩手もて、希望を播種することを止めない。約束せられたる光榮に比すれば、迫害の如きは、何でもない。彼は自分の血を、希望せしところを證する爲に付したのである。パスカルは、『證人がその爲に喉を抉ぐらるゝ事をすら顧みざる話ならば、余はたちどころにこれを信じよう』と云つたが、この議論は無條件では容れられない。何故ならば、種々の異端、或は、誤れる宗教にも、殉教者があるからである。しかし、パウロは、復活し給ひしキリスト、即ち、十二使徒がさきに之を見、トマがその創痕を探り、彼自身その御聲を聞き、御面を仰ぎ奉りしキリストの證人として進出たのだ。而して、パウロの證言を裏書するは、彼の信仰が世界を變更した事實である。

しかし、それは、半ば、世界を變へただけである。死の能力は、決して、教會に打勝たぬ、しかし、

教會も主の再臨の以前には、死の能力を全く打拉ぐことが出来ないと、イエズスは豫告し給うた。信仰が非常に衰へて——主自ら之を告げ給ふのである——弱いキリスト教徒等が、如何にして主は勝ち給ふべきぞと自問するやうな時機もあらう。その時は、ローマ書を読むがよい。忠實に對する御約束は、單にアブラハムに對してのみならず、我等の爲にも、彼等の爲にも、與へられたことを悟るに至るであらう。

パウロは最上の希望の喇叭なのだ。

世紀の最後に至るまで、此のキリストのよき兵士は、必要ならば、夜となく、晝となく、陣營の間を馳せ廻つて、警戒と突撃との譜を吹きならす。彼は勇士の魂を勵まし、弱者、負傷者の心を奮ひ起し、死者をさへ立上がらせて、敗るゝこと能はざる戦闘に呼び集める。しかし、この戦闘喇叭には、大なる奇蹟によつて、謙遜と天使的柔和との調が宿つて、愛と終なき幸福との統治を歌ふのである。

一九二三——一九二五年

(註一) パウロを目して折衷主義者とする、最も頑なる論者と雖も、此の事實を認めざるはない。この點に關して、彼はギリシヤ思想より、何等の影響をも受けず、全くその反對である。トウセン『ギリシヤ思想と使徒パウロ』を参照せられたい。

(註二) ローマ書、五ノ一四、及び聖トマ註釋を参照せよ。

(註三) 聖トマ『我等の主、イエズス・キリストの人性について』

昭和十七年四月十五日初版發行  
昭和十七年三月二十五日再版  
昭和二十一年三月廿五日再版

東京大司教認可

初版  
再版  
一〇〇〇部  
一〇〇〇部

定價貳拾圓

譯者 戶塚文卿

發行者 東京都中野區江古田三ノ一二〇〇  
內野作藏

印刷者 東京都牛込區市谷加賀町一ノ一二  
小坂孟

印刷所 東京都牛込區市谷加賀町一ノ三  
大日本印刷株式會社

東京都中野區江古田三ノ一、二〇〇聖パウロ會

發行所 中央出版社

振替(東京)六二二二三三  
會員番號A一一七〇〇五

配給元 東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

終



中央出版社